パーソナリティ研究
2004　第13巻　第1号　104–105

ショートレポート

© 日本パーソナリティ心理学会 2004

女子短期大学生の対人不安傾向と仮想的面接評価場面における自己注目の関係 1)

Social anxiety and self-focused attention during a imaginary job interview of women's college students

佐藤香織　東京大学大学院 総合文化研究科
丹野義彦　東京大学大学院 総合文化研究科
佐々木淳　東京大学大学院 総合文化研究科

問　題

Clark & Wells（1995）は社会恐怖の認知モデルの中で，社会恐怖に特有の自己注目の存在を明らかにしている．社会恐怖の人は対人場面で自己注目をしやすく，そのような自己注目が社会恐怖の症状を維持する要因の1つであるとされる．社会恐怖（social phobia）と対人不安（social anxiety）の関係について両者は連続線上にあるとする考えが提出されている（McNeil，2000）．本研究もこのような立場に立ち，女子短期大学生を対象としていることから，これ以降健常者の対人不安傾向について議論を進めていくことにする．また社会恐怖と対人不安の定義についてここでは幅広く設定し，「対人状況における不安や恐怖」であるとする．本研究では対人不安傾向と注意の向き，及び対人場面で感じる不安感情についてFigure 1のような因果モデルを立てた．注意の向きについては，自分自身の感情や考え，他者に与える印象など自分に関連するものに注目することを自己注目，周囲の環境や他人に注目することを外部注目とする．また，対人不安傾向の高い人が対人場面で感じる不安感情のことを，状態不安と呼ぶことにする．このモデルでは対人不安傾向から状態不安へと至る経路について，以下の想定がされている．第一は対人不安傾向から自己注目を経て状態不安へと至る経路である．Clarkらのモデルによれば，対人不安傾向の高い人は対人場面では否定的な社会評価を懸念して過度の自己注目状態に陥り，状態不安や不安に関連する身体症状へと注目した結果，更に状態不安が増大する．大学生を対象とした実験では対人不安傾向の高い群が低い群に比べ，対人場面で有意に高い自己注目を示した（Mellings & Alden，2000）．以上から対人不安の者は対人場面で自己注目しやすく，結果として状態不安を強く感じるだろう．第二の経路は対人不安傾向から直接状態不安へ至る経路である．Clarkらのモデルでは，対人場面での状態不安を高める要因として対人場面を危険であると認知することや，曖昧な社会的刺激を過度に否定的に解釈するバイアス等が挙げられている．よって，対人不安傾向から自己注目を介さずに，直接状態不安に影響を与える経路も存在すると考えられる．第三には，外部注目との関係である．外部注目をすることには対人場面での不安を抑制する効果があると考えられる．社会不安の被験者にスピーチ場面で外部注目させた場合は，自己注目をした時よりも状態不安が有意に減少した（Woody，1996）．外部注目は否定的評価への懸念から注意を逸らし，状態不安を抑制すると考えられる．またClarkらのモデルでは社会恐怖の人は対人場面においてまず対人状況を危険であると認知してから自分への評価を懸念する．これは外部の環境に対する注目が自己注目を引き起こしていると考えられるので，外部注目から自己注目へ至る経路が想定できる．

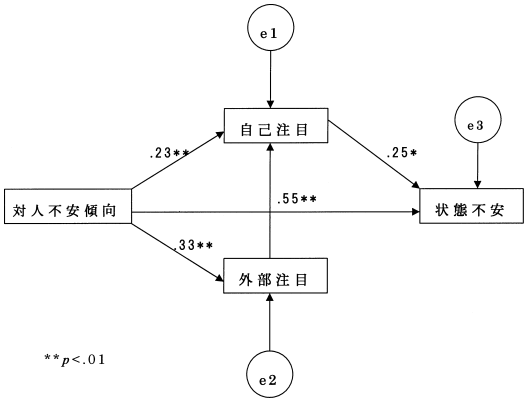

Figure 1　対人不安傾向と注意の向き，状態不安のパス解析モデル

方　法

調査対象者と手続き　都内の短大に通う女子学生を対象に集団式で質問紙法を実施した．質問紙の冒頭で，教示により自分が重要な就職の面接を受けており，面接官から質問をされている場面を想定させた．就職の面接場面は，対人不安を引き起こしやすい他者からの評価を受ける公式場面であり，調査対象者にとって想像しやすい身近な対人場面として選択された．場面を想定した後に，注意の向き，不安感に回答させた．また最後に対人不安傾向を測るための尺度に回答させた．有効回答の得られた215名（平均年齢18．44歳）について分析した．

質問紙　①自己注目・外部注目を測定する尺度には状態版焦点的注意尺度（佐藤・丹野，2003）を使用した．この

1）本研究の一部は平成15年度日本教育心理学会第45回総会において発表された．

Table 1　各尺度間の単純相関と α係数

	対人不安特性	自己注目	外部注目	状態不安
自己注目	.414**	.625**	.200**	.85
外部注目	.334**	.391**	.68	
状態不安	.443**	.82		
α係数	.92			

**p<.01

尺度は，自己と外部への注意の向きを測定する尺度であり，Chambless らによって作成された Focus of Attention Questionnaire（Woody，1996）を原著者の翻訳許可を得てバックトランスレーションし，新たに項目を加えて作成されている．自己注目尺度と外部注目尺度という 2 つの各 9 項目の下位尺度から構成されており，5 件法で回答する．自己注目と外部注目の 2 因子構造を確認的因子分析によって確認したところ，GFI が.851，AGFI が.810，RMSEA が.066 と十分な適合度を得た．

②状態不安を測定する尺度として，State-Trait Anxiety Inventory（STAI）日本語版（清水・今栄，1981）を使用した．これは Spielberger らが特性不安と状態不安を測定するために作成した，4 件法で回答する尺度である．本研究では清水・今栄の翻訳による状態版尺度の 20 項目を使用した．

③対人不安傾向を測定する尺度として修正版対人不安感尺度（岡林・生和，1991）を使用した．これは Leary（1983）の対人不安感尺度の日本語版であり，全 14 項目・5 件法の尺度である．分析では全項目の単純加算得点を使用した．

結　果

各尺度の α係数は.68～.92 であり，外部注目尺度にやや問題はあるものの，概ね十分な内的整合性が得られた（Table 1）．対人不安傾向は自己注目・外部注目・状態不安の全てに対して中程度の正の相関を示した．状態不安も自己注目・外部注目に対して正の相関を示し，自己注目と外部注目はやや強い正の相関を示した．

次に，パス解析を用いて対人不安傾向から自己注目を介して状態不安へとつながる因果関係を分析した．有意水準（α=.01）を満たさなかったパスは削除した．対人不安から自己注目を介し，状態不安へと至るパスはパス係数がそれぞれ.23，.25 と，正の値を示した．また，対人不安から直接状態不安へ至るパスも.34 と正の値を示した．対人不安傾向から外部注目へのパスは.33，外部注目から自己注目へのパスは.55 と正の値を示した．モデルの適合度指標は，GFI が.995，AGFI が .942 と，十分な値を示していた．

考　察

パス解析から対人不安傾向から自己注目を介して状態不安へと至る経路の存在が示された．また，対人不安傾向から状態不安への自己注目を介さない直接的な影響が示された．これらは仮説を支持する結果である．対人不安傾向の高い者は否定的評価への恐れから対人場面で自己注目をするが，自己に関する否定的信念を持っているためにネガティブな自己イメージにとらわれてしまい，不安感が増大すると考えられる．対人不安傾向の人は外部注目もしやすいことがわかった．対人不安傾向の人は他者の反応を見て自己に対する評価を推測しようとしているのではないだろうか．

仮説とは異なり，外部注目は状態不安には直接影響しないことが示された．対人相互作用の相手に注目するのか，周囲の環境に注目するのかによって不安に与える影響が異なる可能性があり，今後検討を要する問題である．外部注目と自己注目には強い関連があり，外部注目から自己注目へ至る経路が支持された．対人場面ではその状況を危険であると認知することが，他者からの否定的な評価を恐れて自己注目するきっかけとなると考えることができる．

本研究では対人不安傾向と注意の向き，状態不安の関係や，自己注目と外部注目の関係について新たな示唆が得られた．しかし，場面想定法を用いて面接場面を想像させているため，今後は実際の対人場面においても同様の知見が得られるかどうか検証する必要があるだろう．また Table 1 に示したように外部注目尺度の α係数は低い値を示した．他者への注目を測る項目と周囲の環境への注目を測る項目が混在していることが尺度の内的整合性を減少させたと考えられる．今後は外部注目尺度の項目内容を整備し，状態不安や自己注目との関係を検討することが必要であろう。

引用文献

Clark, D. M., & Wells, A. 1995 A cognitive model of social phobia. In R. G. Heimberg, Liebowitz, M. R., Hope, D. A., & Scheier, F. R. (Eds.), *Social phobia: Diagnosis, assessment and treatment*. New York: The Guilford Press. Pp. 69–93.

Leary, M. R. 1983 Social anxiousness: The construct and its measurement. *Journal of Personality Assessment*, **47**, 66–75.

McNeil, D. W. 2000 Terminology and evolution of construct in social anxiety and social phobia. In DiBartolo, P. M. & Hofmann, S. G (Eds.), *From social anxiety to social phobia*. Allyn & Bacon A Pearson Educational Company. Pp. 8–19.

Mellings, M. B., & Alden, L. E. 2000 Cognitive processes in social anxiety: The effects of self-focus, rumination and anticipatory processing. *Behavior Research and Therapy*, **38**, 243–257.

岡林尚子・生和秀敏　1991　対人不安感尺度の信頼性と妥当性に関する一研究　広島大学総合科学部紀要，**15**, 1–9.

佐藤香織・丹野義彦　2003 状態版焦点的注意尺度作成の試み　日本教育心理学会第 45 回総会発表論文集，426.

清水秀美・今栄国晴　1981 STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版（大学生用）の作成　教育心理学研究，**4**, 348–353.

Woody, S. R. 1996 Effects of focus of attention on anxiety levels and social performance of individuals with social phobia. *Journal of Abnormal Psychology*, **105**, 61–69.

― 2003. 10. 23 受稿，2004. 3. 11 受理―